

広島平和記念資料館 令和3年度第1回企画展

焼け跡 **もの** 語り



なぜ、私ハコンナ姿ニナラナケレバナラナカッタノ？

2021.9.17(金) ~ 2022.2.13(日)

はじめに

「戦時中でも化粧をしていたの?」

ある日、学芸員は被爆した化粧品の瓶を見てこう思いました。当時は食料も満足に手に入らない時代だったのに、女性たちはささやかなおしゃれをしようとしていました。女性たちにとって、それほどあきらめ難いことだったのでしょうか。それを裏付けるように、当館には被爆した化粧品の瓶が50点以上寄贈されています。

このように人々が暮らしの中にささやかな楽しみや癒しを求めるのは、76年前も今も同じであるように思われます。暮らしの中で使われていた「もの」は、たとえひどく変形していても、当時の人々が私たちと同じ感覚を持って暮らしていた部分があることを感じさせます。

このたびの企画展では、原爆投下後の焼け跡で見つかったものを手がかりに、当時の人々の暮らしや思い出をたどります。これらをご覧くださいいただくことで、当時の人々を身近に感じ、なぜその命や暮らしが奪われなければならなかったのか、考える機会にさせていただければと思います。

広島平和記念資料館

原爆で焼き尽くされ、人気もなく、建物の残骸があるだけの広島街。しかし、焼け跡に散在する陶器やガラスの瓶は、人々の暮らしがそこに確かにあったことをもの語っていました。焼け跡で見つかった「もの」を手がかりに、それらがどのような暮らしの中で使われていたものであったかたどります。

■化粧品からたどる女性の装い

1937年(昭和12年)の日中戦争開始以降、戦意高揚のため、派手な化粧は自粛を求められるようになりましたが、女性たちは「みだしなみ」として薄化粧を続けました。戦時下では、明るく、若々しく、健康であることが平時以上に望まれたため、「素肌美」や「健康美」が化粧のキーワードになりました。被爆した化粧品類からは、生活がひっ迫する中でも、できるだけ美しくなろうとしていた女性たちの姿が浮かびます。



コンパクト
爆心地から1,500m 昭和町
石井ミホカ寄贈



サヨ子さん

②

① 内田サヨ子さん(当時14歳)のコンパクトです。中にはおしろいが入っていました。サヨ子さんは勤め先に向かう途中で被爆し、全身に火傷を負いました。帰宅したサヨ子さんは自分の顔を確認しようと「鏡を見せてほしい」と母親に頼みましたが、かわいそうで見せられないと思った母親は、「もう少し良くなったら見せてあげる」と言って鏡を見せませんでした。サヨ子さんは8月19日に亡くなりました。



化粧クリームの瓶

ゆがんだふたに「クラブ美身クリーム」と刻まれているのがかろうじて見えます。金属製のふたは、1938年（昭和13年）以降製造が抑制されたため、この瓶はそれ以前に製造されたものだと思います。

化粧品の瓶

瓶の形から「クラブ乳液」または「クラブ水白粉」の瓶だと思います。溶けたガラスが付着しています。



③

④

戦時中の化粧品

戦時中はガラスや金属が不足していたため、ガラスの代わりに陶器で瓶が作られ、ふたは木製が多くなりました。

左：クラブ乳液

右：クラブ水白粉



⑤



⑥



⑦

戦時中の化粧品広告

左：「働く肌のアレ止めに」(クラブ美身クリーム)
宝塚歌劇二月雪組公演観劇パンフレット掲載 1942年(昭和17年)

右：「戦時下の肌の保健に」(クラブ乳液)
宝塚歌劇六月月組公演観劇パンフレット掲載 1942年(昭和17年)

日中戦争の開始とともに化粧品広告には戦時下を意識したキャッチフレーズが並ぶようになりました。労働力不足を補うため女性も外で働くようになったことから、働く女性を意識した言葉が見られます。



⑧



1943年(昭和18年)ごろ
広島女子専門学校

⑨

洋装で働く女性

写真は広島女子専門学校の教職員たち。大正時代以降、都市で働く女性が増えるとともに洋服を着る女性が増えました。洋服に合わせて化粧や髪型も洋風になり、パーマが流行しました。日中戦争開始以降、パーマはぜいたくなものとして禁止が呼びかけられましたが、実際には戦争末期まで続けられていました。電力不足になると、客が家から木炭を美容院に持って行き、パーマをかける際の熱源としたこともあったようです。



⑩

空襲に備えた服装—モンペ

モンペは昔から日本にあった作業用のズボンで、主に農家の女性たちがはくものでした。しかし、日本本土への空襲の危機感が高まると、都市でも日常的にモンペをはく女性が増えていきました。モンペは作り方が簡単で、自宅にある和服から仕立て直すことができたので、女性たちは自分でモンペを作りました。

■寿司屋の食器からたどる食料事情

日中戦争の開始以降、軍需工場や戦地に農家の働き手が取られたことに加え、肥料不足などもあり、深刻な食料不足が起きました。

飲食店も食材の入手が難しくなったり、不要不急のぜいたくだとみなされたりして、戦況の悪化とともに営業が難しくなりました。これらの食器は、そのような事情から休業していた寿司屋の食器です。空襲に備え地中に埋められていたところ、原爆に遭いました。火災の熱で変色した後も保管されてきた膨大な数の食器は、店を再開できなかった店主の悔しさをにじませます。



寿司屋の食器

爆心地から1,000m 榎町 吉田芳郎寄贈

吉田清吉さんは寿司屋を営んでいましたが、戦況の悪化で白米が入手できなくなり、代わりに玄米、麦、粟でも寿司を握りましたが、とうとう営業できなくなりました。

8月6日、清吉さんは動員先の工場で被爆しましたが、何とか助かりました。しかし、店は火災で焼けてしまい、その後再開することはありませんでした。

これらは寿司屋で使っていたもので、戦後まもなく焼け跡から掘り出したものです。全部で80点以上あるものの一部です。

⑪

■酒器からたどる戦時下の酒

戦時中は酒も配給の対象になりました。娯楽が制限されていく中、酒は、人々に残された数少ない楽しみになりました。これらの銚子やさかずき、ビール瓶は、焼け跡で集められたものです。銚子やさかずきはよく見ると美しい柄のものも多く、持ち主のお気に入りだったのではないかと想像されます。

銚子、さかずき、さかずきの受け皿

爆心地から2,100m 南観音町 木村太矩次寄贈

木村義太郎さん(当時48歳)が愛用していたものです。義太郎さんは、転居届を提出しに市役所に行くため自宅を自転車で出たまま行方不明になりました。これらは、お酒好きだった義太郎さんの遺品として妻の貞子さん(当時45歳)が自宅の焼け跡で拾い、戦後も大切に使用していたものです。



⑫



⑬

焼け跡で拾い集めた銚子、さかずき

武田シヅコ寄贈

武田学郎さんは、被爆の惨状を伝える資料として、1946年(昭和21年)7月から2~3年かけて市内をまわり、溶けた瓶や陶器類などを100点以上収集しました。

これらはその一部です。熱で変形したり、溶けたガラスがくっついたりしています。



⑭

ビール瓶

左: 被爆約50年後に行われたビルの改築工事の際、発見されたもの。

爆心地から900m 流川町 岡村温雄寄贈

右: 被爆約40年後、広島駅前前で工事中に掘り出されたもの。

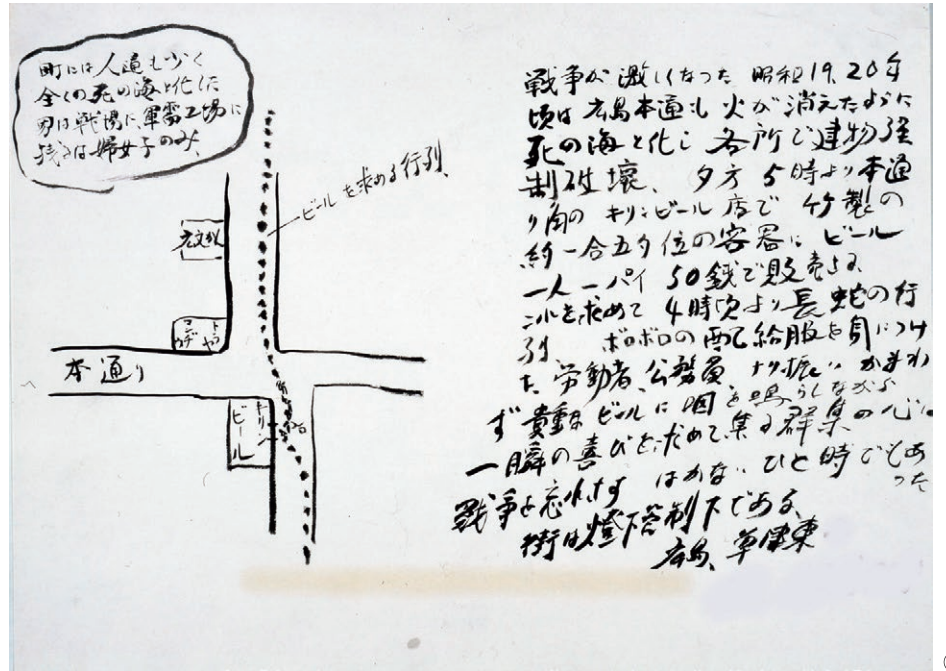
森岡信義寄贈



⑮

戦時下の酒事情

当時一番飲まれていた酒は日本酒で、70%と圧倒的なシェアを占めていましたが、戦時中は原料の米が不足したため、水のように薄い低品質な日本酒が出回りました。金魚が泳げるほど薄いという意味で「金魚酒」と呼ばれました。日本酒不足は1940年(昭和15年)ごろから深刻になり、1941年(昭和16年)10月から全国で家庭用の日本酒の配給が始まりました。同じ年、家庭用ビールの配給も始まりました。日本酒が品不足になると、それを埋め合わせるためビールの需要が伸び、ビールが家庭に普及する素地になりました。しかし、1945年(昭和20年)5月ごろにはビールも生産が難しくなり、生産停止に追い込まれました。



本通り商店街の東端にあったキリンビヤホールは、戦争末期でもビールが飲めた貴重な酒場でした。夕方5時の販売開始に合わせて1時間前から行列ができ、売り切れてしまう日もあったようです。絵には本通りを越えて八丁堀方面まで行列が伸びている様子が描かれています。

1944年-1945年(昭和19年-20年)ごろ 爆心地から670m 堀川町 堀輝人絵

16

2

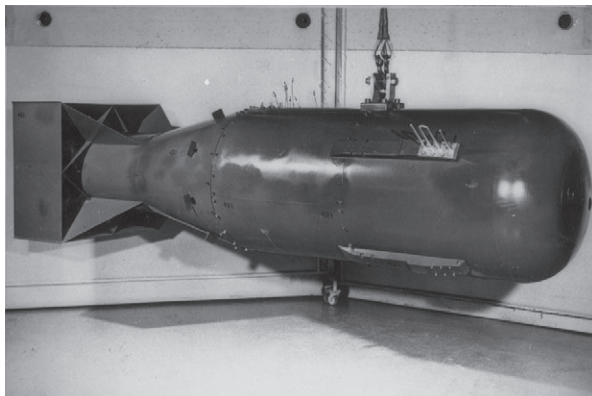
たった一発の爆弾で——熱線と火災

いったいなぜこんなことに——ものが溶けているということは、それだけ高温だったということです。原爆の熱線や火災の痕跡が残るものと向き合っていると、たった一つで都市をまるごと破壊し、焼き尽くしてしまう核兵器の恐ろしさが伝わってきます。

広島に原子爆弾を投下したB29爆撃機「エノラ・ゲイ」
「エノラ・ゲイ」はポール・ティベッツ機長の母親の名前。



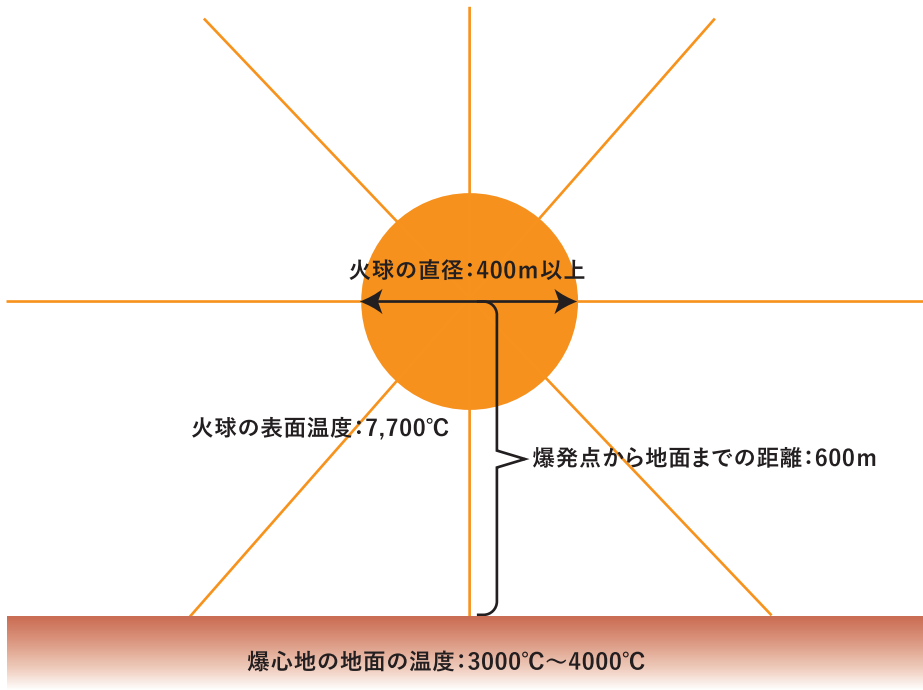
17



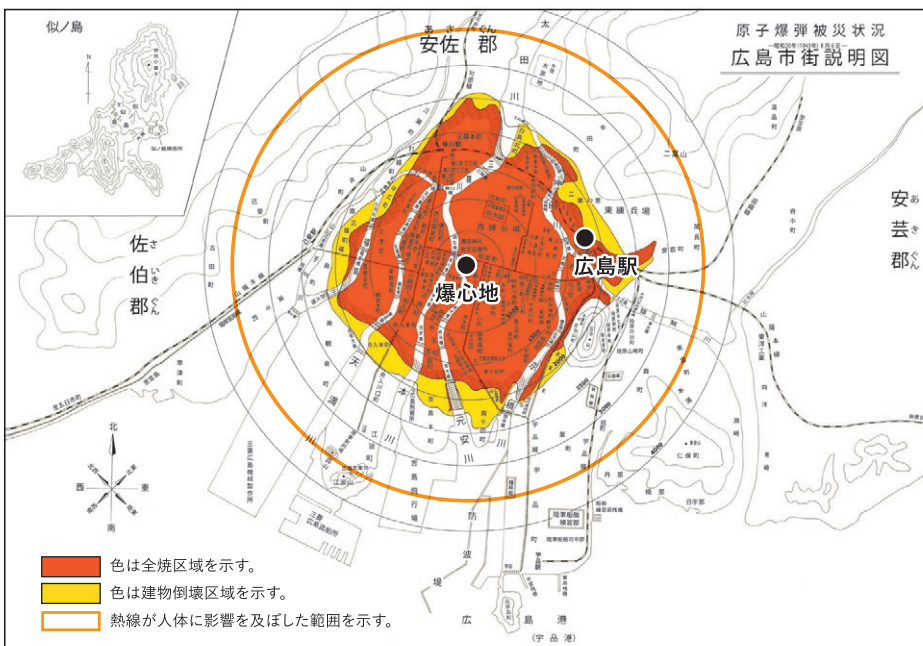
広島に投下された原子爆弾「リトル・ボーイ」
長さ:約3m
直径:約70cm
重さ:約4t
爆発の瞬間、放射線、熱線、爆風を発生させました。

18

爆発から0.2秒後の火球(イメージ図)



⑱



⑳

火球から放たれた「熱線」

原爆がさく裂すると爆弾周辺の空気の温度が数百万度に急上昇し、爆発点に火球が発生しました。急激に膨張した火球は赤外線や紫外線、可視光線などを膨大に放射し、数秒間地上に影響しました。原爆がさく裂した瞬間人々がピカッと感じた「閃光」は可視光線によるものです。人体の火傷やものの溶解、蒸発、発火現象を起こした「熱線」とは赤外線です。

熱線と火災の範囲

熱線は爆心地に近いほど強く影響しましたが、遮るものがあるかないかでその影響はかなり違いました。例えば、ビルの中など熱線が遮られる場所にいた人は、爆心地から500メートル以内でも熱線による火傷は負いませんでした。

一方、屋外で遮る物がない場所にいた人は、2キロメートル離れた場所でも致命的な火傷を負いました。服から出ている肌に熱線が火傷を負わせた範囲は、爆心地から3.5キロメートル離れた地点まで及びました。

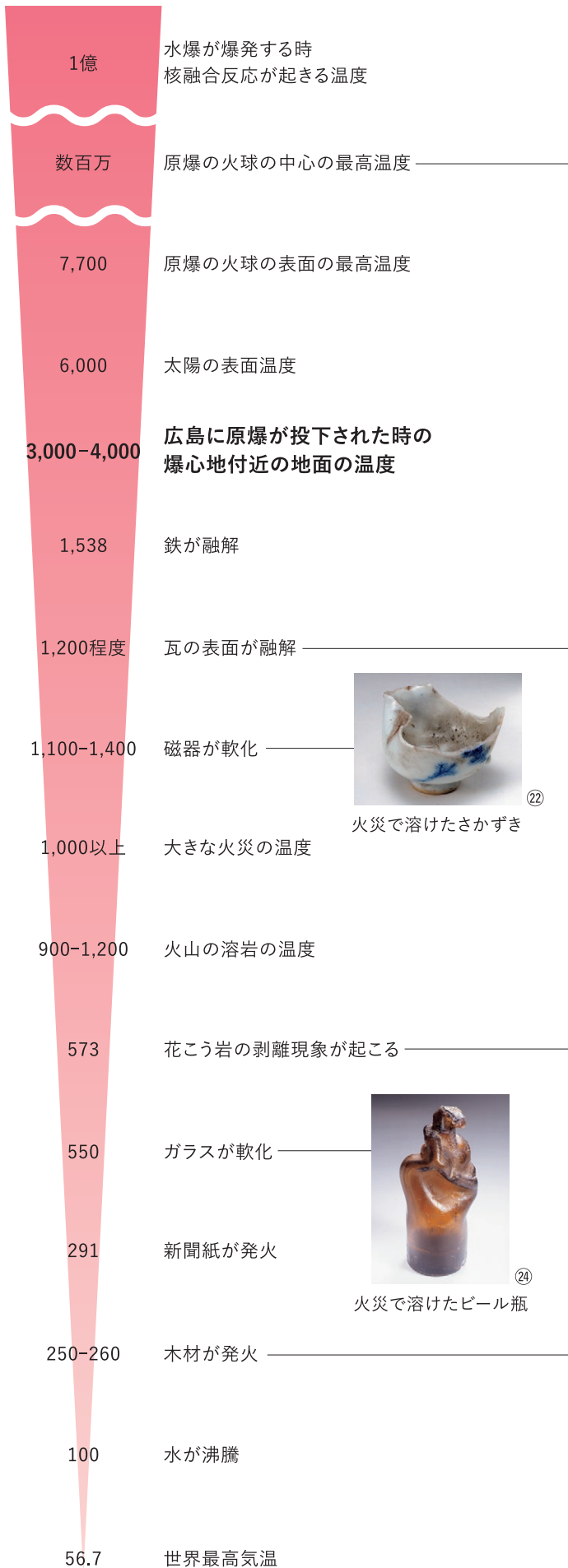
6日午前8時15分	原爆さく裂。木、紙、布など燃えやすいものが熱線で着火。爆風によって一瞬で建物倒壊。
午前8時30分ごろ	熱線による着火と倒れた建物の台所の火が原因となって、市内各所から火の手が上がり始める。
午前9時ごろ	火災が大きくなる。
午前10時～午後2時ごろ	激しい火災。全市火災の煙で包まれる。
午前11時～午後3時ごろ	局所的に激しい竜巻発生。
夕方～夜	火の勢いはやや衰えたがまだ燃え続ける。この時間になって初めて火災が発生する場所も。
7日～9日	各所に残り火。再燃して大きな火災に発展することも。

火災の経過

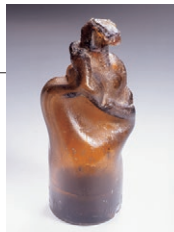
爆心地から半径2キロメートル以内は、火災でほとんど焼き尽くされました。

火災は1日ではおさまらず、場所によっては3～4日燃え続き、余じんは1週間に及びました。

高温のもの・ものが変化する温度（単位：℃）



火災で溶けたさかずき



火災で溶けたビール瓶

世界初の原爆実験



アメリカは広島に原爆を投下する3週間前、ニューメキシコ州で世界初の爆発を伴う核実験を行いました。

1945年(昭和20年)7月16日
ニューメキシコ州 アラモゴード

熱線の影響を受けた瓦

普通、瓦の表面は滑らかですが、熱線の影響を受けた瓦は表面に融解した跡(ガラス状の部分)や、蒸発した跡(発泡した部分)が見られます。融解は1,200℃程度以上で起こり、蒸発はそれよりさらに高い温度で起こると考えられます。熱線の影響を受けた瓦は、広島では爆心地から少なくとも600メートル以内で見られ、爆心地に近いほど激しく発泡していたと報告されています。なお、瓦が重なっていた部分は熱線が当たらなかったため、表面は変化していません。



爆心地の瓦

爆心地の島病院付近で採集されたものです。融解だけでなく蒸発の痕跡も見られます。

菅謙一寄贈

熱線の影響を受けた花こう岩



白っぽくなっているA面は熱線を浴びた面、元の色が残るB面は熱線を浴びなかった面。

爆心地から500m

広島とその周辺の地質には花こう岩が多く含まれ、建築物や墓石などの石材としてよく使われてきました。花こう岩に原爆の熱線が当たると、汚れた表面がはがれ(剥離)、その下の白くて新しい面が現れるという現象が起こりました。この現象は、花こう岩に含まれる石英が573℃以上にならないと起こらないもので、爆心地から約1,000メートル以内の地点で見られました。当館本館に展示中の「人影の石」もこの現象を示すものです。

熱線で発火・炎上した木製の柵



熱線は鉄道の枕木や線路沿いの柵も発火させました。

1945年(昭和20年)8月末
爆心地から2,100m 山手町

3 がれきの街

原爆による激しい火災の後、広島は一面がれきに覆われた廃墟になりました。

これらの写真は、1945年(昭和20年)10月から11月にかけてアメリカ軍がカラーフィルムで撮影したものです。空や川の青さと一面に広がるがれきの色とのコントラストが、破壊され、何もかもが焼けてしまったむなしさをいっそう感じさせます。



残っているのは
コンクリートのビルばかり
1945年(昭和20年)10月12日

アメリカ軍が東京から飛行機で広島入りした際、鉄砲町上空から爆心地を含む広島市中心部を撮影したものです。コンクリートのビル以外ほとんど何も残っていません。

⑲



⑳



㉑

ほぼ同じ範囲が写る近年の航空写真

原子爆弾と焼夷弾との比較

太平洋戦争末期、日本各地の空襲で多く使われた爆弾は焼夷弾でした。発火性の薬剤が中に詰められ、火災を発生させることが目的の兵器でした。たくさんの爆撃機から膨大な量の焼夷弾が投下され、木造家屋が多かった日本の都市を焼き払いました。他都市への空襲で使われた爆撃機の数や爆弾の量を見ると、たった1発で都市を破壊した原子爆弾がいかに強力だったかがわかります。

出所: 早乙女勝元監修、東京空襲・戦災資料センター編『決定版東京空襲写真集』、東京都編パンフレット「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」、大阪空襲写真集編集委員会編『写真で見る大阪空襲』、新修名古屋史編集委員会編『新修名古屋史』第6巻、羽田博昭「横浜の空襲」横浜市史資料室「市史通信」第22号、神戸空襲を記録する会『神戸空襲体験記<総集編>』、神戸市文書館ホームページ「神戸空襲の概要」、アメリカ陸軍航空隊B-29部隊者、小山仁示訳「日本空襲の全容—米軍資料マリアナ基地B29部隊」

各都市で最も被害が大きかった空襲	爆撃機の数 (単位:機)	投下された爆弾の量 (単位:トン)	死者数 (単位:人)
東京大空襲 (1945年3月10日)	279	1,665	83,793
大阪大空襲 (1945年3月13日)	274	1,733	3,987
名古屋大空襲 (1945年3月19日)	291	1,858	826
横浜大空襲 (1945年5月29日)	454	2,569	3,649
神戸大空襲 (1945年6月5日)	474	3,079	3,454
広島への原爆投下 (1945年8月6日)	1 (観測機2機が随行)	4 (1発)	約140,000 (1945年末までの死者数)



繁華街 1945年(昭和20年)10月~11月
八丁堀西方の繁華街だったあたり。一面焼け野原で見る影もありません。

③①



広島県産業奨励館 1945年(昭和20年)10月~11月
広島県商工経済会から広島県産業奨励館(現原爆ドーム)を撮影したもの。焼け野原の向こうに広島湾に浮かぶ島々が見えます。似島は大規模な救護所となり、多くの被災者が運ばれました。江田島からは救援隊がその日のうちに駆けつけました。

③①



焼け跡から宮島を望む 1945年(昭和20年)10月~11月
広島県商工経済会から南西方向を撮影したもの。手前は現在の平和記念公園の北端です。焼け野原の向こうに宮島が見えます。爆心地から16キロメートル離れた宮島でも窓ガラスが割れるなどの被害が出ました。

③②

4 焼け跡で見つけた思い出

原爆で変色・変形して元のように使うことができなくなったものでも、寄贈者は長年大切に保管していました。どんな姿であっても、寄贈者にとっては大切な思い出の品であり、捨てるに忍びないものだったからです。これらの品々をじっくり見つめる時、二度と以前の暮らしを取り戻すことができない喪失感、悔しさ、怒りなど焼け跡に立った人のやるせない気持ちが思い起こされます。



自宅跡から掘り出した食器類

爆心地から470m 大手町四丁目 本田俊夫寄贈

本田俊夫さん(当時36歳)は大手町の自宅で3人の兄たちと商店を営んでいました。同居していた家族8人のうち、自宅にいた兄2人、姉1人、義理の姉1人、姪1人の5人が被爆死しました。これらは、俊夫さんが自宅の焼け跡から掘り出したものの一部です。俊夫さんは何度も捨てようとしたのですが、亡くなった人の無念を思うとどうしても捨てることが出来ず、大切に保管していました。その数は145点にものぼりました。

③③



福助人形

爆心地から1,400m 平塚町
高山秀夫寄贈

白井寅市さん宅の床の間にあったもの。自宅は全壊・全焼し、寅市さんは家族7人を原爆で失いました。寅市さんはこの福助人形を家族の遺品として大切に保管していました。

③④



仏像の頭部

爆心地から1,700m 平野町
唐津幹雄寄贈

原爆投下から2か月後の10月ごろ、唐津義雄さんが自宅焼け跡で発見し、持ち帰ったもの。次男と四男を原爆で亡くした義雄さんは、この仏像を息子たちの形見のように大切にしていました。

③⑤



福祿寿の置物

爆心地から1,400m 上柳町
山本ヨシコ寄贈

山本ヨシコさん(当時43歳)がいとこの梶川倭一さん(当時75歳くらい)宅の焼け跡で拾ったもの。当時倭一さん宅には、倭一さん夫婦と若い兵士の3人がいましたが、ヨシコさんが訪ねると、家は完全に焼失し、全員亡くなっていました。ヨシコさんは倭一さんのものと思われる遺骨とつもは棚にあった福祿寿の置物を見つけ、形見代わりに持ち帰り、約40年間大切に保管していました。

③⑥



一輪挿し

爆心地から500m 元柳町
西口キヌヨ寄贈

西口キヌヨさんの夫・春男さんとの思い出の品。キヌヨさんの兄が、キヌヨさんの自宅裏の防空壕から掘り出して届けてくれました。当時キヌヨさんは市外に疎開していて無事でしたが、元柳町で理容店を経営していた春男さんは行方不明になりました。幼い子どもを抱えていたキヌヨさんは、戦後生計を立てるため理容店を再開し、この一輪挿しを店にずっと飾っていました。

③⑦



春男さん 1932年(昭和7年)撮影

③⑧



小皿

爆心地から350m 天神町 山崎寛治寄贈

山崎寛治さん(当時17歳)の自宅焼け跡で見つかった皿です。1945年(昭和20年)9月中旬、寛治さんと姉は、母親と名古屋からの疎開で同居していた叔母や3人のいとこたちの遺骨を捜すため、自宅焼け跡を掘り起こしましたが、結局誰の遺骨も見つけることはできませんでした。その際に掘り出したこの小皿は、うずら豆やおひたしを入れる皿として寛治さんが幼い時からずっと使っていたもので、家族の唯一の遺品となりました。

③9



湯たんぼ

爆心地から200m 中島本町 富田カツミ寄贈

富田早吉さん(当時72歳)と妻のサイさん(当時67歳)、五男の妻の富美子さん(当時21歳)は、自宅で被爆しました。何もかもが焼き尽くされ、遺骨も見つからない中、五男の忠雄さん(当時28歳)は、早吉さん愛用のこの湯たんぼを焼け跡で見つけました。忠雄さんはこれを形見として大事に保管していました。

④0



駐屯部隊の遺品

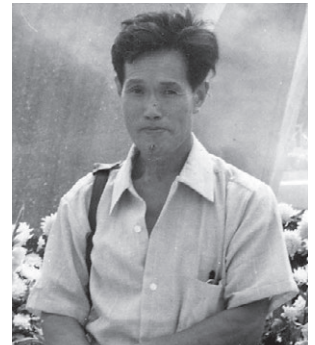
爆心地から1,000m 幟町 幟町国民学校 茶木原実人寄贈

寄贈者の茶木原実人さん(当時31歳)は、戦争末期に本土決戦に備えて設置された広島地区第一特設警備隊の一員として幟町国民学校に駐屯中、被爆しました。実人さんは何とか脱出しましたが、校舎にいた隊員約300人の大多数は亡くなりました。

④1



幟町国民学校(写真中央)



実人さん

④2

④3

実人さんは戦後、部隊の生存者・遺族捜しに奔走し、慰霊碑の建立に尽力しました。1981年(昭和56年)に幟町国民学校跡で行われた公園造成工事にあたって発掘された遺品を収集し、90点近く当館に寄贈しました。

炎との闘い

広島市内にあった2つの官設消防署(東消防署・西消防署)と出張所・分遣隊計22隊のうち、被爆後に出動できたのは周辺部の13隊でした。人員も消防車も不足する中、消火活動は困難を極めました。周辺部では消火活動によって延焼が食い止められた場所もありました。また、警防団員も各所で消火を行いました。被災地図上で赤く塗られた全焼区域の境界線では、消火活動に従事した人たちの悪戦苦闘がありました。

倒壊した西消防署皆実出張所

8月6日午後2時ごろ

爆心地から2,600m 翠町

窓の向こうの倒壊した建物は、西消防署皆実出張所です。爆風で倒れた建物の下敷きになった隊員を助け出し、消防車を何とか外に出し、火災現場に出動しました。



④4



溶けたガラスの塊と銚子
爆心地から250m 中島本町
津島初美寄贈

④5

津島武一さんが、被爆約1週間後に中島本町の福亀旅館の厨房焼け跡から収集したものです。武一さんは、福亀旅館を仕事関係の集会や会議でよく利用していました。旅館内では従業員2人のほか、宿泊客も1人犠牲になったと思われます。道路向かいにあった旅館経営者の福島さん宅では4人が被爆死しました。



急須
爆心地から750m
新川場町
森牧子寄贈

④6

石田長子さんが焼け跡で掘り出して大切にしていた両親の遺品。長子さんの父親の甲村信一さんは、自宅近所を散歩中に被爆し、行方不明になりました。母親の喜和さんは、比治山付近で勤労奉仕中に被爆し、火傷を負いました。長子さんの懸命な看病により火傷は治りかけましたが、下痢が止まらず、被爆から1か月後に亡くなり、長子さんが自ら喜和さんを火葬しました。



分銅
爆心地から1,600m 東観音町二丁目
大前茂樹寄贈

④7

薬剤師だった中村菊枝さん(当時33歳)の仕事道具だったもの。自宅の焼け跡から掘り出されました。当時菊枝さんは、戦況の悪化により薬剤が出回らなくなったため、自分の薬局をやめ、十日市で勤めていました。原爆で行方不明になり、遺体すら見つかりません。



菊枝さん 1944年(昭和19年)撮影 ④8

息子・圭二さんのお話より

忘れもしない昭和20年3月25日、小学校2年の終業式の日、母の入院先に行き、疎開先の祖父の家へ「行ってくるよ」と言って別れたのが最後でした。こんな別れになるとは夢にも思っていませんでした。母がこの分銅とピンセットを使って働いていた姿をはっきり覚えています。いつもこの分銅を使って母の手伝いをしていました。



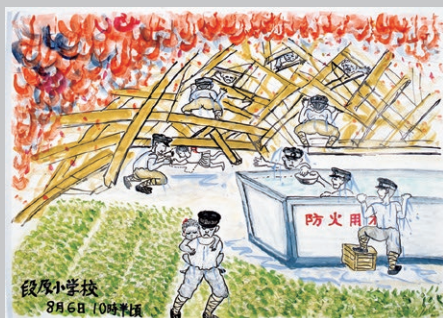
花瓶
爆心地から800m
空鞆町
石田泰三寄贈

④9

石田泰三さんの自宅の玄関にあったもの。火災の熱で黄土色に変色しています。自宅では、泰三さんの母親、姉、祖父の3人が被爆しました。母親と姉は家で半分焼けた遺体となって見つかり、どうにか脱出して郊外に逃げた祖父もやがて亡くなりました。自宅は全壊・全焼でしたが、この花瓶は不思議と割れずに残っていました。泰三さんはこの花瓶を床の間に飾り、家族の形見としてずっと大切にしてきました。

学校での救助活動

段原国民学校では、消防隊員や広島工業専門学校の学生が駆けつけ、必死に消火・救出活動を行いました。校舎は全部炎に包まれ、子どもたちを残したまま引き下りながらの得ませんでした。彼らの耳には子どもたちの助けを呼ぶ声がいっまでも残りました。



8月6日午前10時30分ごろ
爆心地から1,800m 金屋町 段原国民学校
加藤義典絵

⑤0

相次ぐ困難

写真は東消防署の焼けた消防車です。中心部の消防署・出張所は多くの死傷者を出し、消防車も失いました。また、出動できた隊も困難に見舞われました。火災の熱や道路の障害物のためタイヤのパンクが相次いだほか、川の水を使って消火していると、引き潮で川の水位が下がって吸水不能になり、活動できなくなりました。



爆心地から720m 八丁堀 東消防署

⑤1

木原八十吉さん(当時65歳)とテルさん(当時60歳)夫妻は自宅で被爆し、亡くなりました。娘の博子さん(当時16歳)は一人で何日も両親の遺骨を捜し続け、自宅跡の灰の中からやっとの思いでわずかな遺骨を見つけ出しました。抹茶茶碗はその時見つけたもので、茶道と華道に造詣の深かったテルさんの唯一の遺品です。



抹茶茶碗 ⑤2
爆心地から450m 尾道町
糸博子寄贈

池田治一さん(当時43歳)と7月に生まれたばかりの次女の弘美ちゃんは原爆で大火傷を負い亡くなりました。経営していた時計宝石店も焼けてしまい、妻のタカヨさん(当時35歳)と長女の光江さん(当時15歳)は、原爆で全てを失いました。このオパールは店の焼け跡から見つかったものです。中身が焼けて軽石のようにになっています。



オパール ⑤3
爆心地から950m 下流川町
山根光江寄贈



せいじゅうじ 清住寺の仏具 ⑤4
爆心地から530m 鷹匠町 清住寺耕田八洲寄贈

清住寺の第20代住職・耕田八洲さん(当時33歳)が寺の焼け跡で拾い集めたものの一部。当時八洲さんは応召中で、島根県浜田市で原爆の閃光を感じました。すぐ広島に戻りましたが、寺は焼けてなくなり、寺にいた母のツギさん、妻のよしゑさん、娘のやよひちゃん、妹の中村まや子さん、姪の中村國望ちゃんの5人全員が亡くなっていました。八洲さんは焼け跡で拾えるものは全て拾って寺の境内で保管し、決して手放すことはありませんでした。一方で、亡くなった家族について胸の内を語ることはありませんでした。寺には今も、八洲さんが拾い集めた墓石や庭石が並んでいます。



被爆後の清住寺周辺 ⑤5



耕田さん一家 1943年(昭和18年)撮影 ⑤6

原爆の熱が起こした気象現象

原爆のさく裂と火災の熱によって発生した上昇気流は、雨や竜巻を発生させ、風向きを変えるなど通常ならありえない様々な気象現象を起こしました。本来自然のものである気象を変えてしまうほど、原爆による熱は強力だったのです。こうした気象現象は、火災の広がり方や避難経路、消火活動に大きく影響しました。そして、何が起こったかわからなかった人々にとって、大きな脅威となりました。

黒い雨

原爆さく裂後、きのご雲から黒い雨が降り始めました。早い場所では20分後から降り始めたとも言われています。続いて火災によって積乱雲が発生し、土砂降りになるところもありましたが、市街地の火災は消えませんでした。黒い雨には爆弾由来の放射性物質、爆発で吹き上げられたちりや泥、火災由来のすすなどが含まれていました。当時の広島市域をはるかに超え、広範囲で降りました。



爆心地から1,400m 8月6日午前9時ごろ 東観音町二丁目 ⑤7
小間義衛絵



鉛の塊

爆心地から520m 塚本町
中本善也寄贈

⑤8

中本勝人さん(当時20歳)が、父親の勝三さんが経営する印刷所の焼け跡で見つけたもの。活版印刷の活字が日本酒の瓶の中に入り込んで固まったものです。瓶は花瓶として使っていました。応召中で広島にいなかった勝人さんと自宅で被爆した勝三さんは無事でしたが、印刷所にいた兄の泰夫さん(当時26歳)、姉の文子さん(当時25歳)をはじめ社員約35人はほとんど亡くなりました。勝人さんは、「兄や姉、社員たちの魂が固まったものだ」と亡くなるまで大切にしていました。



腕時計

爆心地から800m 基町
山内満子寄贈

⑤9

豊田豊さん(当時42歳)の被爆時の所持品。豊さんは、勤務先の中国軍管区司令部で被爆して亡くなりました。自宅で被爆した妻の沢女さん(当時31歳)は、豊さんを心配してすぐに現場に駆けつけようとしたのですが、引き止められ、その日は断念しました。沢女さんは8月9日から焼け跡に通い、豊さんの部下が拾ってくれていた遺骨を受け取りました。その後、沢女さんは遺骨が発見された場所から豊さんの遺品を掘り出し、大切に保管していました。



インク瓶

爆心地から1,600m 千田町一丁目
渡邊和夫寄贈

⑥0

渡邊和夫さん(当時15歳)のペンのインク瓶。和夫さんは腹痛を起こし、家の離れで休んでいた時に被爆しました。布団をかぶって寝ていたためか、大きなけがをしなかった和夫さんは、母屋に住んでいた中学校の先生の妻を助け、2人で吉島まで逃げ、先生とも再会しました。翌7日、和夫さんは防空壕に埋めていた食料を掘り出しに、先生と一緒に家の焼け跡に戻りました。その時、自室の勉強机に置いてあったこのインク瓶を見つけました。



入れ歯

爆心地から300m 天神町
岡原ツネヨ寄贈

⑥1

岡原政太郎さん(当時49歳)のもの。政太郎さんは、天神町の勤務先で被爆しました。妻のツネヨさん(当時38歳)は9日から長女の伸子さん(当時18歳)と2人で政太郎さんの消息をたずね歩きました。被爆から1週間後、勤務先の焼け跡で政太郎さんの席があったあたりを掘り返してみると、椅子に座った状態で骨が並んでおり、その間に入れ歯があり、右手を伸ばした位置で弁当箱などが見つかりました。2人はその場でぼう然としました。



時計

爆心地から500m 材木町
小川春蔵寄贈

⑥2

小川春蔵さん(当時33歳)が自宅の焼け跡で掘り出したもの。春蔵さんの妻イツエさん(当時21歳)は、材木町の自宅で被爆し、亡くなりました。春蔵さんは、郊外の勤務先から大勢の負傷者や死体をかきわけ自宅へと向かいました。火災のためなかなか近寄れず、8日の朝、廃虚と化した自宅跡へやっと戻りました。まだ熱い土を掘り返し、イツエさんの遺骨と遺品を掘り出し持ち帰りました。

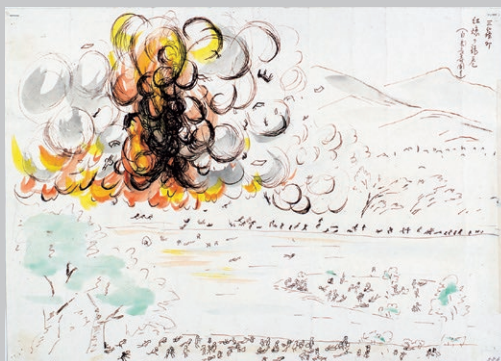
小川春蔵さんの体験記より

自分も拾ってきたスコップを手に焼け跡へ立つ。ひと掘りごとに火が吹き出してくる。ズック靴の底が熱い。小さい置時計が転がり出る。焼けただれてはいるけれど、大体の形をなしている。長針も短針もそのままにちょうど八時三十分辺りを指している。我が家はこの時刻ごろに灰塵に帰したのであろう。あちこち掘る中についに白骨を発見す。何の印もなければ正しくイツエの遺骨に相違はあるまい。涙と汗が白骨の上に音を立てて落ちていく。一つひとつ拾うたびに指先は熱い。

(仮名遣いは現代仮名遣いに改めています。)
出所:「原爆体験記」原稿(広島市公文書館蔵)

竜巻

午前11時から午後3時にかけて、南風と北風の境に位置する広島駅や縮景園、横川駅周辺など市の北半分で局所的に激しい旋風(竜巻)が起きました。これは、川の両岸では火災で上昇気流が発生していたのに対し、比較的気温の低い川の上では下降気流が発生し、温度差の大きい両者がぶつかる場所だったためだと考えられています。竜巻は強大で、金属製の板やドラム缶、一升瓶、人体さえも宙に巻き上げました。



爆心地から約1,500m 8月6日午後 三篠地区

香川千代江絵

⑥3

風向きと風速の変化

広島市の南部では夏の間、通常なら昼間は南風(海風)が吹き、夜は北風(陸風)が吹きます。風向きは朝と夜に切り替わりますが、原爆が投下された日は夜も火災が続き、陸上の温度が下がらなかったため、風向きが切り替わらず、海風が翌朝まで続きました。また、夕方から夜にかけて平時より風が強くなりました。

おわりに

原爆に遭ったものを通して当時の人々に思いをはせると、その命とささやかな暮らしを奪った原爆、そして戦争への怒りがこみあげてきます。その怒りを、憎しみではなく、だれもが笑顔で暮らせる世界をつくるためのエネルギーに変えていくことが、原爆の悲しい記憶が刻みこまれたものから、私たちに手渡された宿題なのではないでしょうか。本展をご覧になって考えたことを、皆様の「今」、そして「未来」に活かしていただければ幸いです。



図版一覧(敬称略)

表紙:変形した化粧クリーム瓶 中村利代寄贈、広島平和記念資料館蔵/①、③、④、⑪-⑬、⑲-⑳、⑳-㉑、㉒-㉓、㉔-㉕、㉖-㉗、㉘-㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿:広島平和記念資料館蔵/②;石井ミホカ提供/⑤、⑥;株式会社クラブコスメチックス蔵、国立歴史民俗博物館提供/⑦、⑧;立命館大学国際平和ミュージアム提供/⑨;中山慶洋寄贈/⑩、⑱、㉒;広島平和記念資料館作成/⑰;Peter H. Brothers提供/⑳、㉑;米国立公文書館蔵/㉔;北勲撮影/㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿;米軍撮影/㉑;広島市広報課提供/㉒;西口キヌヨ提供/㉓;林重男撮影/㉔;茶木原アキヨ提供/㉕;松重美人撮影、中国新聞社蔵/㉖;中村圭二提供/㉗;米国戦略爆撃調査団撮影、米国立公文書館蔵/㉘;大橋完造撮影、広島平和記念資料館蔵/㉙;清住寺耕田八洲提供/裏表紙:全て広島平和記念資料館蔵

主な参考文献

山村博美『化粧の日本史—美意識の移りかわり』、石田あゆ『図説 戦時下の化粧品広告<1931-1943>』、国立歴史民俗博物館編『身体をめぐる商品史』、飯田未希『非国民な女たち—戦時下のパーマとモンベ』、鈴木芳行『日本酒の近現代史—酒造地の誕生』、サッポロビール株式会社広報部社史編纂室『サッポロビール120年史』、被爆建造物調査研究会編『被爆50周年 ヒロシマの被爆建造物は語る—未来への記録』、広島市編『新修広島市史』文化風俗史編、広島県編『広島県史』近代2、鹿野政直ほか編『図説日本文化の歴史12 大正・昭和』、吉田裕ほか編『アジア・太平洋戦争辞典』、日本学術会議原子爆弾災害調査報告書刊行委員会編『原子爆弾災害調査報告集』第一分冊、広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編『広島・長崎の原爆災害』、山田克哉『核兵器のしくみ』、広島市消防局原爆広島消防史編集委員会編『原爆広島消防史』、田賀井篤平『はじける石・泡立つ瓦 蘇る石の記憶—ヒロシマ・ナガサキ』、沢田昭二『核兵器はいらない!—知っておきたい基礎知識』、国立天文台編『理科年表2021』

広島平和記念資料館令和3年度第1回企画展 焼け跡もの語り

期間 2021年9月17日(金)~2022年2月13日(日)

会場 広島平和記念資料館東館1階企画展示室

発行 広島平和記念資料館学芸課

730-0811 広島市中区中島町1-2

TEL 082-241-4004 FAX 082-542-7941 <http://hpmmuseum.jp/>